

「げんかえれじい」のラスト

シーン、主人公麒麟六が駅で新聞

を読む。「東京では大げんかを

している。俺は東京に行く。あ

の鋭い目の男は北一輝ではなか

ったのか」。東京の大げんかと

は「二・二六事件」のことであ

樹も主人公の麒麟六をのびのびと

演じていた。娯楽映画を時代に

放り込んだ瞬間に娯楽映画は娯

楽だけの映画ではなくなる。

「追憶や 白湯飲む季節秋の

暮れ」遊園。遊園はわたしの俳

号である。いま決めた。わたし

は小田急線の向ヶ丘遊園に住ん

玄界灘といつても星鹿にある津

崎の灯台下の磯ではあるが。わ

たしは、潜ってサザエを取るの

がうまかった。

若い人は阿佐田哲也という小

説家をご存じだろうか。本名は

色川武大で、この名義で多くの

小説を発表し多数の賞を受賞し

間杜夫も大竹まこと売れる前

で、暇を持て余していた。その

席で風間杜夫が「阿佐田哲也の

麻雀小説はいい」と薦めてくれ

たのである。風間杜夫はまだ結

婚前で、好きな人の親に「この

男は売れますから結婚させてく

ださい」と熱海まで泊まりがけ

浪記」も読んだ。これは麻雀小

説というよりは戦後大衆史とし

て優れた小説であった。「あん

たは健と五分につきあおうと思

った。でもこの世界の人間関係

には、ボスト、奴隷と、敵と、

このみつつしかないのよ」(麻

雀放浪記)。殺伐としたセリフ

ではあるが、考えさせられた。

これも30年くらい前になる

が、新宿のゴールデン街で偶然

に阿佐田哲也氏と隣り合わせに

なったことがある。「アンダン

テ」というスタンドバーであっ

た。緊張した。阿佐田哲也氏が1

人であったか数人であったかも

忘れた。わたしはコースターを

裏返しにして「なにか書いてい

ただけませんか」とずづずうし

# 麻雀放浪記を読む

ている。昔は、遊園地があつた

土地である。わたしも子ども3

人を連れて遊園地のプールで泳

いだものだ。いまはバラ園にな

っている。わたしは子どもに言

つたものだ。「おまえたちはプ

ールで泳ぎを覚えた。俺は玄界

灘で泳ぎを覚えたのだぞ」。ま、

我々はよく麻雀を打った。風

雪がある世界である。「麻雀放

浪記」も読んだ。これは麻雀小

説というよりは戦後大衆史とし

て優れた小説であった。「あん

たは健と五分につきあおうと思

った。でもこの世界の人間関係

には、ボスト、奴隷と、敵と、

このみつつしかないのよ」(麻

雀放浪記)。殺伐としたセリフ

ではあるが、考えさせられた。

これも30年くらい前になる

が、新宿のゴールデン街で偶然

に阿佐田哲也氏と隣り合わせに

なったことがある。「アンダン

テ」というスタンドバーであっ

た。緊張した。阿佐田哲也氏が1

人であったか数人であったかも

間杜夫も大竹まこと売れる前

で、暇を持て余していた。その

席で風間杜夫が「阿佐田哲也の

麻雀小説はいい」と薦めてくれ

たのである。風間杜夫はまだ結

婚前で、好きな人の親に「この

男は売れますから結婚させてく

ださい」と熱海まで泊まりがけ

浪記」も読んだ。これは麻雀小

説というよりは戦後大衆史とし

て優れた小説であった。「あん

たは健と五分につきあおうと思

った。でもこの世界の人間関係

には、ボスト、奴隷と、敵と、

このみつつしかないのよ」(麻

雀放浪記)。殺伐としたセリフ

ではあるが、考えさせられた。

これも30年くらい前になる

が、新宿のゴールデン街で偶然

に阿佐田哲也氏と隣り合わせに

なったことがある。「アンダン

テ」というスタンドバーであっ

た。緊張した。阿佐田哲也氏が1

人であったか数人であったかも

忘れた。わたしはコースターを

裏返しにして「なにか書いてい

ただけませんか」とずづずうし

くもお願ひした。(松浦市出身)